

## 日本舞踊の詞章と振りの関係についての分析の試み

—『京鹿子娘道成寺』の「恋の手習い」を例に—

日本大学 渡沼 玲史  
専修大学 貫 成人  
日本大学 丸茂 祐佳

本研究では、『京鹿子娘道成寺』の「恋の手習い」の件から日本舞踊における詞章と振りの関係について分析し、それが意味するところを明らかにすることが目的である。日本舞踊ではまず詞章が存在し、その詞章と音楽を元に振付られることが非常に多く、「恋の手習い」の件も例外ではない。

詞章から振りが生み出される方法を考察するにあたり、次の要素を予め提示できる。(a) 詞章 (b) 詞章の意味 (c) 背景となる物語 (d) 詞章の意味から導き出される物語 (e) 動きの意味 (f) 物理的な動き、以上の6種である。これまで単に「詞章」と書いてきたものは (a) (b) に分解でき、「振り」としてきたものは (e) (f) に分解できる。以下、これらの要素をさす場合はこれらの記号で表記する。

詞章と振りの関係を考えるにあたってまず考えられるのは詞章から振りが生み出される所謂当て振りである。また、詞章から (d) を經由して振りが生み出される場合もある。「ふつつり恪気せまいぞと嗜んでみても情けなや」と、踊られる振りとは直接的な関係はない。ここで踊られる振りの意味は大雑把に言って「男に会いに行つて手をとつて連れて行こうとするが振り払われる」である。この振りは詞章の意味をもとに作り出された物語、あるいは詞章で言われている心情が表れる状況を作り出してそれを動きの意味で表現している。

これらをより細かく見ていくと次のように言える。まず当て振りにおいては、(a) → (b) → (e) → (f) というプロセスをたどつて振りを付けていくのが常套だと考えられる。しかし、「ふつつり〜」の例に関しては (a) → (b) → (d) → (e) → (f) というプロセスになっている。(a) → (b) → [(d)] → (e) → (f) という順序で、(d) の「詞章の意味から導き出される物語」が介入しているのである。

このプロセスに別の要素が介入して振りが決められる事もある。「誓紙さえ偽りか」には流儀によって大きく二つの振りがある。一つは誓紙を書く振りであり、もう一つは「恥ずかしそうに後ずさりする」というものである。後者の振りは、『娘道成寺』という作品全体の物語への解釈から導き出されている。つまり、「清姫は処女であるから、まだ誓紙を知らない」という解釈から導き出されている。この場合は、(c) → (a) → (b) → (e) → (f) というプロセスを経ていると言える。

詞章と振りとの関係は、詞章から振りが生み出されるという関係だけではない。「振り = (e) (f)」によって (b) が決められるということもある。たとえば「末はこうぢやにな」という詞章は、通常は「末は夫婦になりたい」という意味に解釈される部分であるが、初世中村富十郎が杖をつく振りをしたという伝説が残されている。もしこの話が事実ではなかったとしても、「振り = (e) (f)」によって (b) が変わりうる可能性があることを示している。

また、(e) と (f) も通常は、(e) が決定された後に (f) が生み出されているが、逆の場合も存在する。それはほぼ同じ (f) でありながら、(e) が変わつていったと思われるものがあることから推測できる。この例としては、「殿御殿御の気が知れぬ」で手拭を額の前にかざす振りをあげることができる。ここには二通りの解釈があり「眉を隠す事で女房になりたいという気持ちを表す」というものと「角隠しのように」というものがある。このように (f) 自体は同じでも (e) が変わりそれが受け継がれているということもある。つまりここには、(e) → (f) のように (e) が (f) を決めるものと、(f) → (e) というように (f) が (e) を決める二つの方向がある。

以上のように、「恋の手習い」のように動きが具体的な意味を持つ振りを見ていくと、一見、(b) がそのまま (e) (f) になっていくように思われるが、実は (b) も (e) (f) によって決められていく事もあり、(b) が意味を独占し、それがそのまま舞踊における意味になるとは言えない。言語化できる舞踊を (a) ~ (f) の6種の要素の集合として考えると、それらは直線的な関係になっていくのではなく、一種の構造をなしていることがわかる。ここでいう構造とは動きや詞章などが他と独立に存在しうるようにはなつておらず、詞章や動き、物語などが相互に規定しあい、しかもその規定の回路がその都度自在に設定されるような形で、諸項が統合されているメカニズムである。

従つて、振りを構造として捉えなおすことによつて、①ごく単純な当て振りのみなされる箇所でも、持つ意味は予め用意されているわけではなく、構造を經由した後に現れるというダイナミックなプロセスの存在がある、②このプロセスは、見る人によって、あるいは見る度に異なるプロセスがとられる、③これまで知られてこなかった作品の意味を見出すことができる、という可能性が考えられる。ただし、本研究では言語化の可能な部分に限つたため、音楽や抽象的な動きには触れることができなかった。これらの要素を含めた上で構造がどのように形成されるか、また他の作品においてこの分析法を用いて構造として捉える手法を試みていくことを今後の課題としたい。

本研究は文科省オープン・リサーチ・センター整備事業日本大学芸術学部プロジェクト「日本舞踊の教育システムの文理融合型基盤研究並びにアジアの伝統舞踊との比較研究」によって行われた。